

アニメ・マンガの受容から異文化理解へ

—アメリカにおける受容者が学ぶ日本語についての考察—

法政大学大学院国際文化研究科修士課程 1 年

20Q8101 西野佳奈

第 1 章 研究概要

これまでに、研究としてではなく、発表者が知り合いのアメリカ人たちと日本文化の受容について話し合ったことで、アメリカにおいて日本のアニメを観るということは、アメリカの日常に溶け込んでいて、もはや特別なことではないと見なされているように感じてきた。その中で、アメリカでの日本語学習の動機付けについての文献を読み、日本のアニメやマンガをきっかけに日本語の学習を始めた人や、学習目的にアニメやマンガの理解がある日本語学習者もいることがわかった¹。しかし、アニメを観るという経験をした後、実際に日本語の学習を始め、しかも、それを初期に放棄することなく継続するという行動を誰しもが取っているわけではない。本研究の目的は、アニメを観たり、マンガを読んだりした経験をそのままにせず、その経験を通して、日本語を勉強してみたいという気持ちになった人が、日本語学習の初期段階から、その学習を通してアニメやマンガの言語表現の理解を深め、そのような言語表現を生み

¹ 国際交流基金による、国・地域別の日本語教育情報を提示しているページでは、アメリカにおける日本のサブカルチャーが日本語学習のきっかけである人たちの存在を示唆している。また、フクナガは、実際の日本語学習者による日本語学習の背景にアニメがあると指摘している。

国際交流基金(2019)「米国(2019 年度) 日本語教育 国・地域別情報」国際交流基金ホームページ
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2019/usa.html#KEKKA>

(2020 年 11 月 22 日閲覧)

Fukunaga, Natsuki. (2006) “Those Anime Students”: Foreign Language Literacy Development Through Japanese Popular Culture. *Journal of Adolescent & Adult Literacy* Vol.50, No.3, pp.206-222.

<https://ila.onlinelibrary.wiley.com/doi/epdf/10.1598/JAAL.50.3.5>

(2020 年 11 月 22 日閲覧)

出す日本の考え方や文化を学ぶことに進んでいくことを促進するように、そのためのあるべき日本語学習について考察を行うことである。

アニメやマンガの言語表現における特徴として、日常的な口語による簡潔な発話であることが挙げられ、その発話においては、役割語を多用することで、簡潔さを高めつつ、発話者の人物造形と受話者との関係性が明示されている²。本研究では、先行研究によって、役割語がアニメ・マンガで果たしている機能を確認する。その上で、アメリカにおいてアニメやマンガを受容する人が、ただ鑑賞するだけではなく、作品中の役割語を理解することは、作品をより深く楽しむことが可能となり、さらに役割語を通じた異文化理解は自己の再理解にもつながり人生をより豊かにすると述べていきたい。それゆえ発表者は、日本のアニメやマンガに関心を持つ人が役割語を学習するための教材や解説書が作られ普及されるべきであると考えている。

本研究は、言語の文法的構造や用法というよりも、言語の中の文化的側面に着目した研究であるため、文化研究として、言語学、日本語学、言語人類学、文化心理学などの分野とも関連しており、この国際文化研究科で研究すべきテーマであると考えている。そして、アメリカにおける日本のアニメやマンガの受容は、受容者の持つアメリカ文化と、日本語や日本語話者側の文化が交差する場を形成して行われることであるため、それぞれの文化的背景や、個々の考え方について配慮し、工夫することが必要であると言え、学際的な視点から考えることが必要であると考えている。文化や人々の考え方が表れる言語は、語や文の操作としての翻訳が決して容易ではないのであるが、日本語で作られた作品を、異なる文化圏の人が、作品の伝える内容をより深く理解するためには、受容者の母語である英語そのものや、受容者の持つ（あるいは考える）アメリカ文化と、日本語そのものや、日本語話者の持つ（あるいは考える）文化の比較をし、さらに文化間の接触による文化の変化について考える準備をすることで、間違った認識や偏見を生まないようにする工夫や配慮を考えていかなければならない。

本研究は、アメリカでアニメやマンガを受容する人の、日本語の理解の仕方やアニメやマンガとの関わり方について確認するためのインタビュー調査をしたのちに、「役割語はアニメ・マンガの内容理解と異文化理解のために重要である」「役割語は自己の再理解のために重要で

² 金水敏(2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店、p.206

ある」「役割語を学ぶことが日本語学習者の将来的な増加につながる可能性がある」という3つの主張を実際のアニメ・マンガ作品に登場する役割語を例に出しつつ論述していく予定だが、本発表では、「役割語はアニメ・マンガの内容理解と異文化理解のために重要である」という点を論じる。

第2章 役割語の重要性

第1節 役割語とは

「役割語」は、金水敏が2003年に『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』という著書の中で提唱した用語である。金水は「役割語」の定義を「ある特定の言葉づかい（語彙・語法・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができる時、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかに使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができる時、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。」と示している³。

金水によると、役割語を構成する重要な指標は人称代名詞と文末表現であり、また、丁寧表現やアクセント、話す速度や滑らかさも役割語の要素となりうる⁴。前掲書において、金水は役割語を使う人物像の例としてお嬢様や博士などを挙げ、また、「一定の語尾を発話の終わりに付加する」ものを「キャラ語尾」と呼び、人だけでなくロボットや妖精などのキャラクターにも役割語が現れることを述べている⁵。このように役割語には多くの種類があり、本やアニメ、マンガなど、様々な場面で使用されていると考えられる。

しかし、この役割語の定義にあるような、特定の言葉づかいと特定の人物像の結びつきは、万国共通のものではなく、文化圏によって異なるだろう。では、アニメやマンガの中で用いられる役割語は、日本以外ではどのように受容されているのだろうか。本研究では、言語の中の文化的側面のうち、この役割語に焦点を置き、日本以外でアニメやマンガを受容する人たちに

³前掲書、p.205

⁴前掲書、p.205-207

⁵前掲書、p.188

とって重要な概念として扱う。それは、発表者が、役割語は翻訳が容易ではないと考えると同時に、日本語における役割語は異文化理解における阻害要因として明確に捉えることでそれを克服することが可能になるのであり、また、日本語を母語としない人たちがそれを理解することで、アニメやマンガ作品をまた異なる視点から、あるいはより深く、楽しむことができるだろうと考えるからである。第2節以降は、その理由について述べていく。

第2節 役割語を翻訳することの難しさ

前述の役割語の重要な要素である人称代名詞と文末表現は、日本語から英語への翻訳が難しいものの例としても挙げることができる。例えば日本語の一人称は、「私」「あたし」「僕」「俺」「拙者」「自分」などが挙げられるが、英語では“I”の一種類しかない。このことによる問題は、「私」や「自分」などそれぞれの一人称の背後にある発話者のイメージが翻訳で消えてしまうだけではない。友達同士で話すときには「俺」と言うが公的な場で発言する際には「私」と言う、など、一人の人間が使用する一人称の変化、すなわち発話者が受話者との関係性や状況によって一人称を使い分けているということも見えなくなってしまう、発話者と受話者の関係や状況を判断する材料が減ってしまうのである。これは文末表現についても同じことが言える。「～です」「～わ」「～だってばよ」⁶といった差異は、英語への逐語的な翻訳では表出できない。人称代名詞の翻訳の難しさについては、村上春樹作品の翻訳に関する研究でも言及されており⁷、また、日本語の「黙殺」という言葉の翻訳を例に、言葉の持つ意味の曖昧さ

⁶ 「～だってばよ」はアニメ・マンガ『NARUTO』の主人公の口癖として使われている。

⁷ Hadley, James. And Akashi, Motoko (2015) Translation and celebrity: The translation strategies of Haruki Murakami and their implications for the visibility paradigm. *Perspectives: Studies in Translation Theory and Practice*, Volume 23, pp.458-474.

https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/0907676X.2014.998688?casa_token=J7sE7eWb-30AAAAA%3A2mFni2UfaM9KIM6qXb8MJtHu-dsIwBLmRQpeI4L92R6vVK6xySphiBVnjYKL3MMmnyz-V8b2dRRLP_bo

(2020年11月23日閲覧)

や、ある言葉を完全な対の状態になるよう別の言語に翻訳することの困難さについて書かれた記事も存在する⁸。

英訳することで日本語の表現の特徴である発話者のアイデンティティや人間関係の表出が言語表現として消失するが、しかし、消えてしまったそれらの特徴を掘り起こし、英訳版で日本のアニメやマンガを受容する人に伝えること、またその人たちが学ぶことは、作品のより深い理解には必要である。なぜなら、アニメやマンガ作品の作者たちは、日本語でその作品を生み出して、意識的か無意識的かは定かではないものの、登場人物たちの性格や個性、人間関係をそこに表しているからである。英語版と日本語版の間の差を埋めるためには、まず役割語という異文化の存在を知り、そして作品に登場する役割語のもつ人物像や人間関係のイメージを掴むことが必要である。

役割語に注目して文化を理解することに意味があるというのは、『言語人類学への招待 ディスコースから文化を読む』に、「文化の理解のためにディスコースを分析するというアプローチをとれば必然的に言語およびその他の記号論的現象の「指標性」に注目することになるのである」と書かれていることからわかるだろう⁹。前掲書では、シルヴァステインによる「言語イデオロギー」の”any sets of beliefs about language articulated by the users as a rationalization or justification of perceived language structure and use”（「知覚された言語構造・言語使用を合理化又は正当化したものとして言語使用者により明示的に言いあらわされた言語に関する信念の集合」）という定義を説明し、「言葉の使われ方やその状況の研究から、人間の社会文化について読み解く人類学の1分野」¹⁰である言語人類学の近年の動向として「言語イデオロギー」

⁸ Anon. 1968. Mokusatsu: One Word, Two Lessons. *Technical Journal*, Fall 1968 - Vol. XIII, No. 4, pp.95-100.

<https://www.nsa.gov/Portals/70/documents/news-features/declassified-documents/tech-journals/mokusatsu.pdf>

(2020年11月22日閲覧)

⁹井出里咲子、砂川千穂、山口征孝(2019)『言語人類学への招待—ディスコースから文化を読む』ひつじ書房、p.180

ここでのディスコースとは、同書 p.43-44 によれば、「社会的実践行為」を指し、「言語が文化、そして社会の実践そのものとみる立場」のことである。

¹⁰同上、p.3

に関する研究の増加が書かれている¹¹。そしてその中で、日本語における「言語イデオロギー」として役割語が例に挙げられているのである¹²。

このように、役割語は翻訳することが難しい一方で、発話行為をより深く理解するために重要であると考えられる。次節では、役割語の理解が、発話行為そのものはもとより、発話者やその発話者を生んだ作者の持つ文化的背景の理解にもつながるといふ発表者の考えに言及する。

第3節 日本における役割

役割語の概念は、言語的な特徴を使って特定のグループや型に押し込めているだけであるという批判もあるだろう¹³。しかし、言語的特徴を特定の役割と結びつける行為は、日本においては重要なことのように思われる。なぜなら東は、「社会が役割体系として組織され、人が役割によって定義され、役割と独立には考えられないような社会を役割社会とよんでみよう。これに対し、社会を独立した個人の集まりとして捉え、役割はそこに派生した機能であるにすぎないという原則に立つ社会を、個人社会とよぶことにしよう。欧米の近代国家に比べて、日本の社会は役割社会的な傾向を色濃く残している。」と述べているからである¹⁴。東はその理由を江戸時代の日本社会に見出し、「日本は役割社会を綿密に制度化し、封建的分業と官僚的統合のバランスがとれるようにした。さらに、役割は必ずしも没個性的なもの、運命に押しつけられるものとは限らなくなった。役割社会でありながら、その配役についてかなりな流動性・選択性を導入しえたのである。」と述べた¹⁵。この役割の流動性・選択性については、ニスベットも「日本語には“I”を意味する言葉が数多くあり、聴き手や状況に応じて使い分けられる。（中略・発表者）こうした言語使用の特徴は、単なる敬意や謙遜の表れというより、『接する相手が変われば自分も変わる』という東洋的な信念の表れであると考えられる。」と言及している

¹¹ 同上、p.181

¹² 同上、p.201

¹³ 役割語を提唱した金水も、役割語はステレオタイプであると述べているが、忠実な現実の反映とは異なる役割語は、日本語のヴァリエーションの総体を捉える上で重要であるとまとめている。

金水、前掲書、p.35-39

¹⁴ 東洋（1994）『日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて』東京大学出版会、p.39

¹⁵ 同上、p.42

16. 北山も、「厳格に自分を鍛え、そして私情をはさまず、役割に精進することは、日本的相互強調の一側面である。」と述べ¹⁷、「日本人の多くには、『らしさ』からのズレーつまり自分に欠けている点、自分が持つ望ましくない特性、あるいは自らの至らない点などをまず同定し（つまり、反省し）、それを努力を通じて無くしていこうとする心理的・行動的傾向がみられることになる。」と書いている¹⁸。

以上のように、役割というものは日本の社会や日本人の心理・行動と密接に関わっていると考えられる。このような役割に対する価値観を持った日本人の作者によって生み出された実在しないアニメやマンガのキャラクターたちも、それぞれの登場人物としての役割を果たすために役割語を話す仕組みになっていると想定すると、役割語を学習することは、作品の中の登場人物についてより深く考察することが可能となり、また、その背景にある日本の役割社会についての解説があれば、アメリカとは異なる文化的背景を知ることでもできると考えられる。ただ個人を特徴付けステレオタイプ化するだけのものとして役割語を学ぶのではなく、このような日本における役割の文化的背景や流動性や選択性といった特徴も学ぶことが重要なのであり、間違った認識や偏見を生まないようにするための工夫や配慮が必要である。そしてこの言語における文化的側面を伝えるにあたっては、言語学の視点だけではない、学際的な視点からの検討が望まれるだろう。

第4節 まとめ

本章では、役割語の定義と、その文化的背景について述べてきた。発表者は、役割語を持たない言語文化圏の人が、日本語に接するときの困難さと、その困難さの原因はその人自身ではなく文化圏であると明らかにし、役割語の有無という差を互いの文化圏の人が知ることによって異文化理解になると考える。また、言語には文化や人々の考え方が表れ、翻訳は容易でないが、日本語で作られた作品を、異なる文化圏の人が、作品の伝える内容をより深く理解するために

¹⁶リチャード・E・ニスベット、(2004)『木を見る西洋人 森を見る東洋人 思考の違いはいかにして生まれるか』村本由紀子訳、ダイヤモンド社、p.66-67

¹⁷北山忍(1998)『自己と感情 文化心理学による問いかけ』共立出版、p.41-42

¹⁸同上、p.43

は、学際的な視点から、間違った認識や偏見を防ぐための工夫や配慮を考えていかなければならない。日本語を母語としない人向けの、役割語の学習に配慮した教材や、アニメやマンガで使われる役割語の解説書のような教材が普及することは、アニメやマンガの受容者が、作品の内容をより深く知ることに加え、作品が作られた日本と、その受容が起きるアメリカの文化の違いに気づき、異文化を学ぶことに貢献するものである。

第3章 今後の研究課題

前章では、先行研究を用いて、役割語の定義や特徴について確認してきた。しかし、アメリカにおいて一般的、あるいは人気があるとされるような具体的な作品における役割語の例やその役割語を学ぶことの重要性についてはまだ確認がなされていない。前章を踏まえた発表者の今後の研究課題は、具体的なアニメ・マンガ作品中の役割語の翻訳の難しさや、それらの役割語から学べることについて分析し、言及していくことである。より具体的な例を挙げていくことで、実際に異なる文化圏の人たちが役割語を学ぶことの有用性や、その際の注意点を効果的に示すことができると考える。

また、修士論文全体としての今後の課題は、本論では触れなかった「役割語は自己の再理解のために重要である」「役割語を学ぶことが日本語学習者の将来的な増加につながる可能性がある」という2つの主張について論述することであり、そのための先行研究の確認やインタビュー調査などを今後進めていく。

参考文献

- 阿部新(2013)「日本語教育における言語規範 言語規範・標準語と役割語」『外国語教育研究』16号、外国語教育学会、pp.156-163
- 井出里咲子、砂川千穂、山口征孝(2019)『言語人類学への招待ーディスコースから文化を読む』ひつじ書房
- 北山忍(1998)『自己と感情 文化心理学による問いかけ』共立出版

金水敏(2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店

国際交流基金(2019)「米国(2019年度) 日本語教育 国・地域別情報」、国際交流基金ホームページ

<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2019/usa.html#KEKKA>

(2020年11月22日閲覧)

東洋(1994)『日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて』東京大学出版会

平野健一郎(2000)『国際文化論』東京大学出版会

リチャード・E・ニスベット(2004)『木を見る西洋人 森を見る東洋人 思考の違いはいかにして生まれるか』村本由紀子訳、ダイヤモンド社

Anon. (1968) Mokusatsu: One Word, Two Lessons. *Technical Journal*, Fall 1968 - Vol. XIII, No. 4, pp.95-100. <https://www.nsa.gov/Portals/70/documents/news-features/declassified-documents/tech-journals/mokusatsu.pdf> (2020年11月22日閲覧)

Fukunaga, Natsuki. (2006) “Those Anime Students”: Foreign Language Literacy Development Through Japanese Popular Culture. *Journal of Adolescent & Adult Literacy* Vol.50, No.3, pp.206-222. <https://ila.onlinelibrary.wiley.com/doi/epdf/10.1598/JAAL.50.3.5> (2020年11月22日閲覧)

Hadley, James. And Akashi, Motoko (2015) Translation and celebrity: The translation strategies of Haruki Murakami and their implications for the visibility paradigm. *Perspectives: Studies in Translation Theory and Practice*, Volume 23, pp.458-474. https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/0907676X.2014.998688?casa_token=J7sE7eWb-30AAAAA%3A2mFni2UfaM9KIM6qXb8MJtHu-dsIwBLmRQpeI4L92R6vVK6xySphiBVnjYKL3MMmnyz-V8b2dRLP_bo

(2020年11月23日閲覧)